

言語行為・コミュニケーション・対話

土屋俊
(千葉大学)

今日の予定

1. 「言語行為論の終焉」論の復習
 - なぜ言語行為論は役に立たなかったか
 - そもそも言語行為論は何だったのか
2. メッセージモデル批判の復習
 - なぜメッセージモデルは役に立たないか
 - そもそもメッセージモデルの偏見は何か
3. 音声対話コーパス研究が示唆すること
 - 共同行為と協調対話？
 - 課題遂行と対話進行との関係
 - さまざまな「同期」の本質

言語行為論で何を指すか

- 語用論 = 言語行為論 + 指標意味論 + その他
- J. L. Austinの1950年代
- John Searleの展開
 - F(p)
 - 分類(目的による)
 - 「間接的言語行為」という目くらし
- 「言語ゲーム」と「言語行為」と区別できない人々
- ここでは、オースティン・サール流
 - 発語内行為、力、慣習性、適切性条件

言語行為論の限界

- 「文」主義の限界
 - Explicit performativeという虚構(断片文、複数文)
 - 相手のいない発話
- 文脈主義の限界
 - 文脈は所与のはず。文の意味が文脈でかわるのでなく、文は文脈に付加されるもの
- 言語使用 = (ちゃんとした)行為という思い込み
- 発語内行為の慣習性とは何か(2つの定義)
- 発語媒介行為の第二義性(かわいそう)
- 聞き手の不在 (addressee, interlocuter, overhearer)

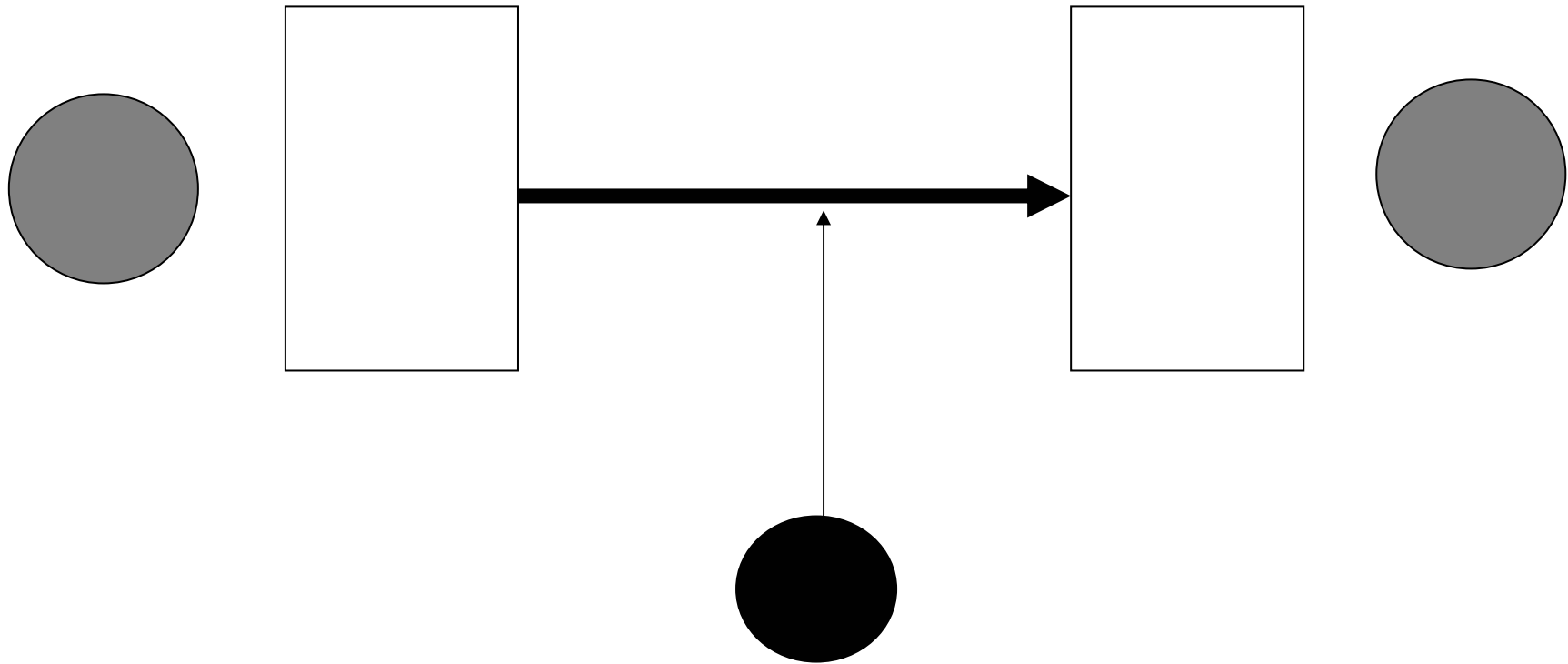
なぜ言語行為論は生まれたか

- 「行為遂行発話」という神話 (I knowとI promise, I own)
- 「記述主義の誤謬」への抵抗
- 「言語ゲーム」論との関係
- いまから考えると「言語主義」的誤謬 (グライスのA-philosopher) アングロサクソンにおける心の哲学の動向・倫理学の動向・論理学の未熟
- 結局、いろいろな期待を担わされてしまった (オースティンの(本人には責任のない)失敗)

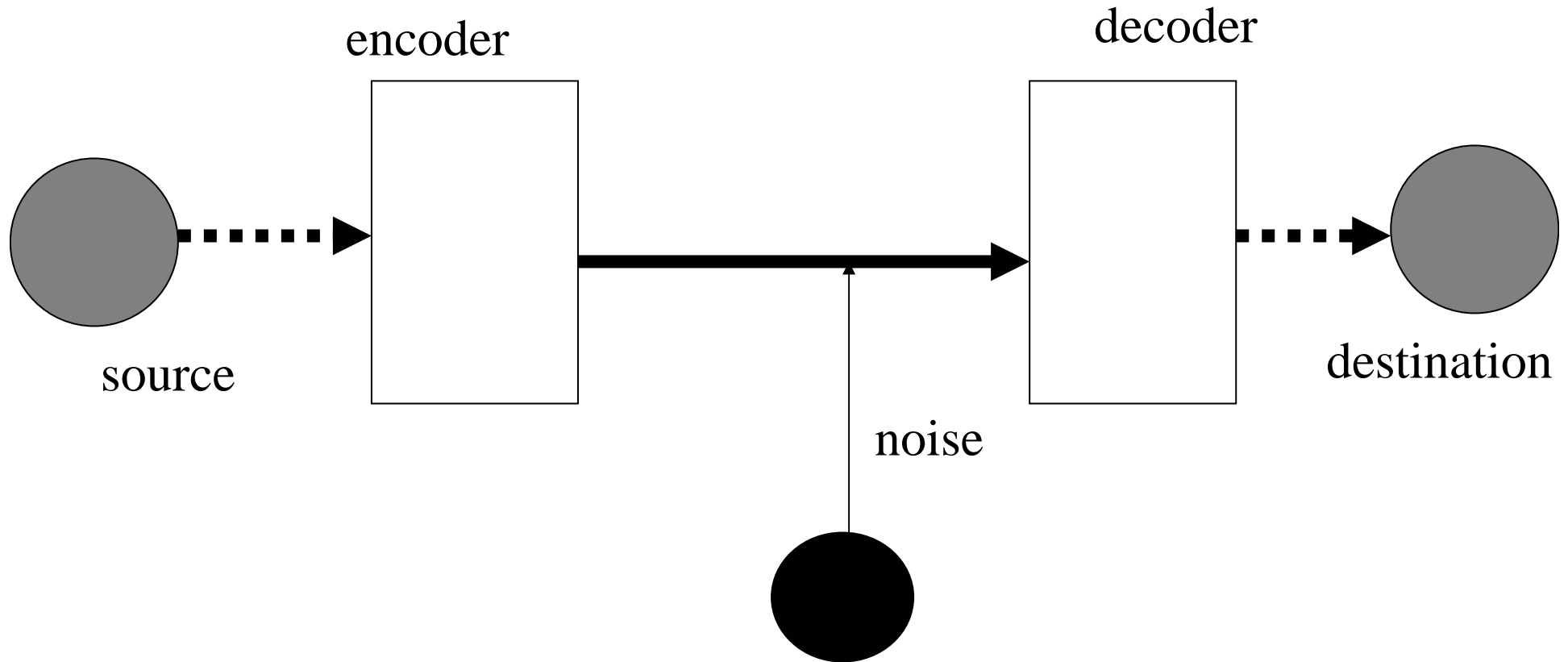
現段階における言語行為論の 位置付け

1. 特定の慣習的行為が言語を必須の要素として
なされるとき分析の出発点
 - a. 不適切性条件による分析
 - b. 近縁行為との関連性
 - c. その分析が意味あることの証明(「約束」、「謝罪」、
「知識」、「合意・決定」など)
2. コミュニケーションの理論とは関係ない
 - 「言葉を理解すること」は言語行為(17節)
3. 行為論のごくごく一部の下位理論にすぎない

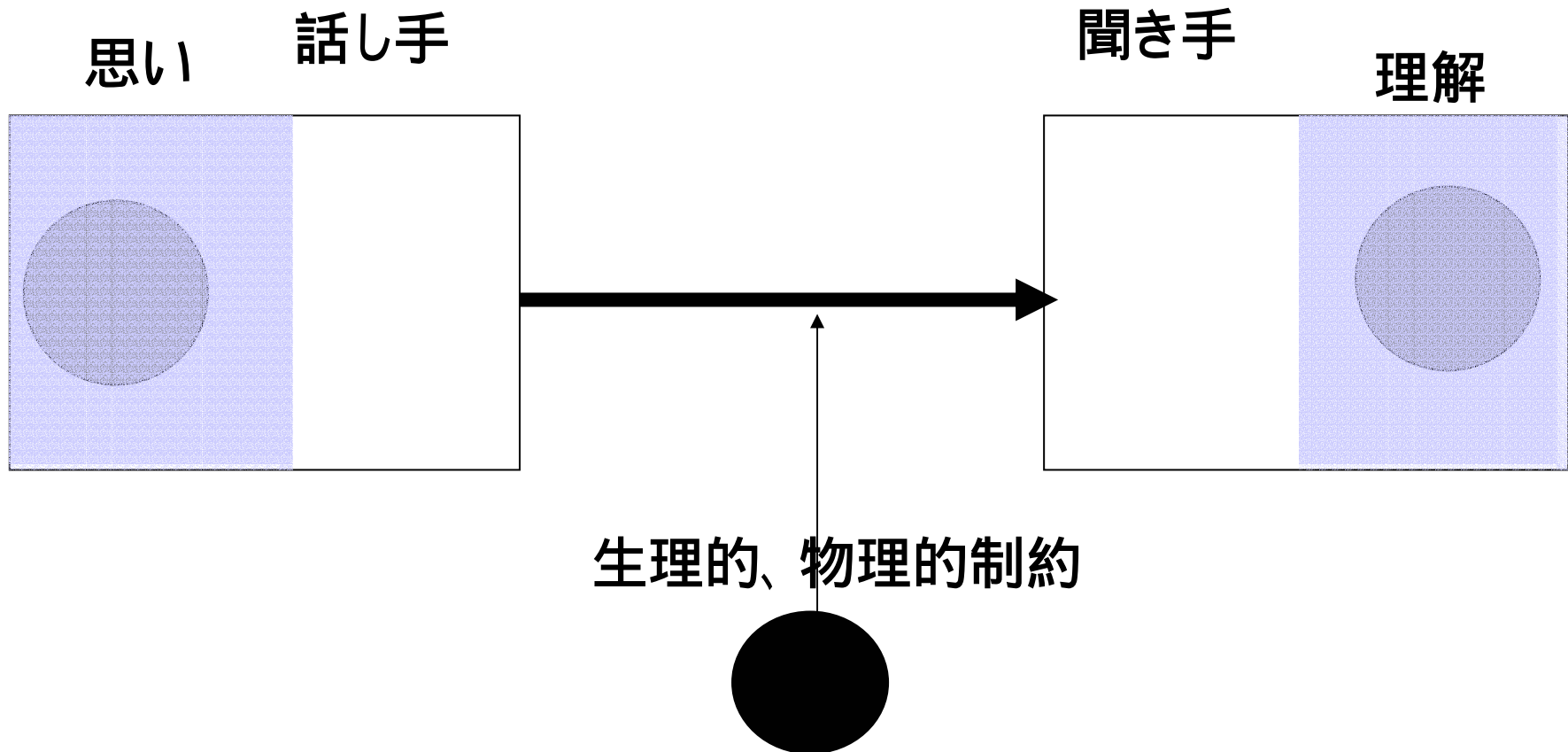
メッセージ・モデル？



通信学者？



常識的(言語((音声)(処理)))学者?



何が理論的に問題か？

- 行為との関係
 - 言語行為
 - 何のために言語が使用されるのか(課題遂行との関係)
- 言語の実態
 - 指標的表現
 - 比喩的表現
 - 推論過程の存在 (Conversational Implicature)
- 聞き手が話し手でもあるということの自然な説明？
- 非言語的要素の介在をどう説明するか
- そもそもコミュニケーションは完結するものか？

何が**経験的に**問題か？

- 行為には時間がかかるという問題
 - 発話のタイミング(やりとり、相槌、順番取りなど)
 - 非同期コミュニケーションをどう考えるか
- 沈黙はまったくの「無」でないという問題
 - 発話がない時間をどう考えるか(やりとり、相槌、順番取りなど)
 - 沈黙は非言語的行為？
- 3人以上の場合の扱い(理論的でもあるが、、、)
- 課題遂行との関係

地図課題対話に学ぶ

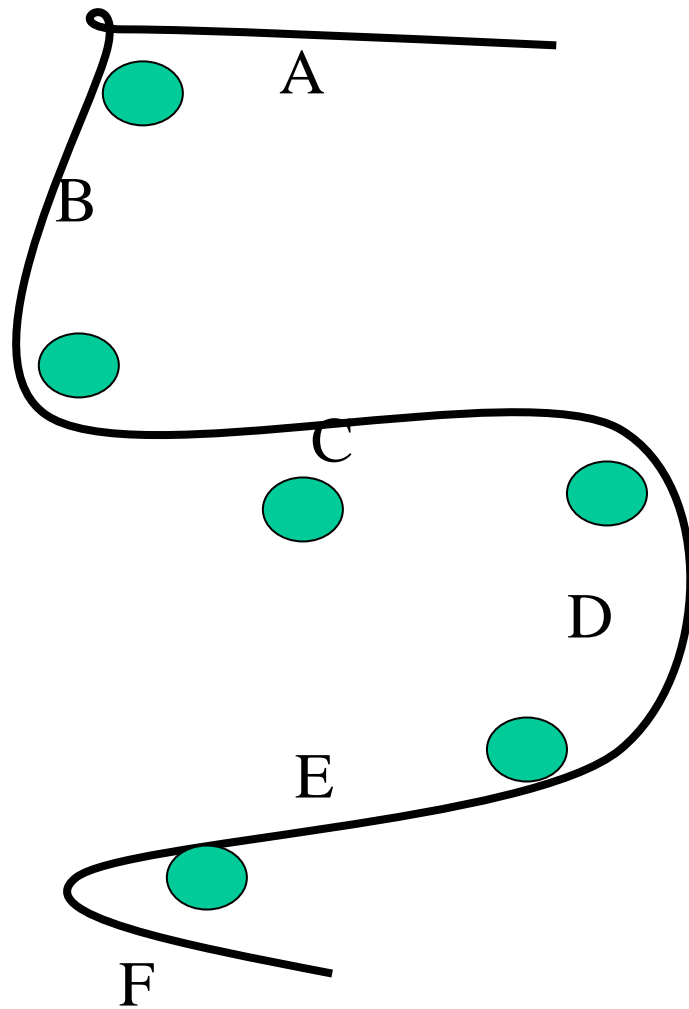
- つまり、まだ、勝手な妄想
- そもそも日本語地図課題対話コーパスとは？
 - HCRC地図課題対話コーパスの改良された日本語版
 - 64人の大学生、16種類の地図を使って128対話、22時間の録音、ビデオ、タイムスタンプ付正書法転記(1994年－1999年)
 - 聞き手側の発話機序(タイミング、キュー、オーバーラップ等)、発話速度、イニシャティブ、相槌(「はい」)、談話構造など)

対話のモデル

- なぜ対話のモデルか？
 - (言語的)インタラクションのモデルのモデル？
 - 情報伝達のモデルのモデル？
 - 共同行為のモデルのモデル？

共同行為と対話進行
- なぜ課題遂行対話をするのか
 - 課題遂行と対話進行との関係 (メッセージモデル批判参照)
 - すべての対話は課題遂行 (の複合)
- 自然現象としての対話？
 - 同期現象とは何か

課題遂行と対話進行との関係



- 課題の遂行は、
 - A B C D E Fと進行する
- 対話の進行は、ほぼ重なるが、digressionがあることが多い
- 二つの構造はかならずしも一致しない
 - 複数プラン可能な場合が中心
- 二つの構造の関係は？

共同行為と協調的対話進行

- ピアノを3人で持ち上げる例に対して
 - 2人で対話を続ける
 - 2人で共同して地図課題を解決する

どちらが「ピアノ」の例によって説明可能か？
- 途中介入発話(オーバーラップ)の位置付け
 - 「相手を理解して早く介入」モデル
 - 「いつでもしゃべりたい、合図待ち」モデル
 - 「双方勝手のしゃべっている」モデル
 - Emergence model
 - 「秩序だっているのが異常」モデル

自然現象としての対話

- 省略
- その他も省略
- 準備が時間切れ